

## 支部だより

### 北海道支部

## 支部事業の活性化—なせばなる?

2005年度 北海道支部長 多田旭男  
(北見工業大学教授)

ファイル名を「支部だより」と決めて入力・変換したところ、画面に「支部頼り」と出た。今でも記憶から消去されない。意味深長な変換ミスだと思ったせいだ。

春季年会恒例の「化学オーケストラ」のような企画を支部研究発表会にも導入できないか。この企画には様々な効果も期待できるし、何よりも楽しい。準備万端整ってホッとしていたある日のこと。「試験日程と重なったという理由でキャンセルされた」という連絡が実行委員長から入った。絶句。後日示された代案は、なんとプロのギタリストに演奏を依頼する、というもの。ギャラは？ 今から交渉して間に合うのか？…。不安は、「もう内諾は得ています」という言葉で払拭された。結果、演奏会は2回も開かれた。1回目は初日(土)の懇親会の歓談中に、2回目は「宮下祥子ミニリサイタル」として2日目(日)の昼休みに。2日目午後は研究発表会がないため帰途についた会員が多く、禁じられた遊び、アルハンブラの思い出などの演奏をプレゼンテーションベイで楽しんだ化学会会員は少なかったが、会場から5階までは吹き抜けなので音色は上階にいる公立はこだて未来大学教職員・学生にも届いた(写真1)。この支部初の企画は参加者にサプライズと深い感動をもたらした。



写真1 宮下祥子ミニリサイタル(会場はプレゼンテーションベイ)

研究発表会場(案)は公立はこだて未来大学。階段教室(280席)1室、中講義室(99席)3室、小講義室(49席)3室、プレゼンテーションベイを予約済み。しかも全室冷房完備で、液晶プロジェクター・パソコン・会場係(学生)までも付けてもらえるという話。借料がかさんで赤字にならないか? 学会運営に協力してくれる化学会正会員が情報系大学にいたのだろうか?…。少しずつ明らかになる情報は悲観的なものばかり。借料は未回答、当該会員数ゼロ、…。それでも実行委員長は会場を変えない前提で準備作業に入った。

「支部は、(財)化学技術戦略推進機構(JCII)討論会の開催にぜひ協力して欲しい」という要請が太田常務理事からなされていた。その後、JCIIから「北海道支部2005年夏季研究発表会の会期に合わせて開催したい」という依頼があった。一般研究発表とは明らか

に毛色が違うJCII討論会をどのような形で開催すればよいのか、一般研究発表の会場数を一つ増やす形で開催する場合、収容人数何名の会場を用意すればよいのか…。日本化学会の定款・規則等を調べてみると、JCII討論会を支部研究発表会に組み込むことには問題がないようである。むしろ、産学連携活動が活発に行われている実情にきちんと対応してこなかったことの方が問題か。そこで、絶好の機会と受け止め、新企画「産学連携セッション」(一般無料公開)を設けることにした。産学連携セッション初日の、特別講演1件、一般講演8件で産学連携ムードを高め、その夜の懇親会で、JCIIの活動および翌日に開催される討論会の趣旨を説明してもらい、支部の論客に参加を促すことをもくろんだ。2日目の朝、JCII討論会会場には参加を期待していた顔ぶれがそろっていた。一般研究発表が並行開催されているにもかかわらず、3時間に及ぶ討論会の会場(280席)には終始、熱気が満ち、時間不足を惜しむ声が聞かれた。

次なる新企画はジュニアセッション。「中高校生のための高専・大学案内」(10:00~12:00)に参加した生徒・同伴者を、午後の「中高校生による研究発表会」に誘い込む作戦。応募した研究発表には、化学色の薄いものが多かったが、今は、できる限り間

口を広げて多くの生徒に大学・高専の化学研究に触れてもらうことが大事と考えて計画を前に進めた。当日、「中高校生のための高専・大学案内」にはそれらしい人影がまばら。しかし午後、廊下から研究発表会場をのぞいてみると、ほぼ埋まっていた（廊下と教室の仕切りは一面、ガラス）。どうやら発表する中高校生は準備に余念がなかったようだ。研究発表を終えた中高生は緊張の面持ちで質疑に臨んでいたが、同時に大きな達成感を漂わせていた（写真2）。発表会終了後には引率教員と大学教員が交流し合う光景が見られ、実験面での今後の協力を約束する声も聞かれた。

最も気になる会場借料はなんとゼロであった。公立はこだて未来大学教員が当該学会会員であり実行委員の一人として施設を使用する場合には使用料を徴収しない規定が適用されたからで



写真2 中高校生による研究発表会

ある。日本化学会会員数はゼロであったはずなのになぜ？ 同大学の先生が、それまで面識がなかった実行委員長の虜になり、正会員になって実行委員を引き受けたからである。著名なクラシックギタリストを招くことができたのはなぜか？ 彼女は学生時代に函館で化学を専攻したことがある（支部HPを参照）からご好意で、というのは正解の部類に入るが、そのときの卒論指導教官まで調べるとより正解に迫れる。

参加者数は346名（一般市民58名、

その他8名を含む）。発表件数は、一般講演150件（口頭発表121件、ポスター発表29件）、特別講演3件、依頼講演1件の合計154件。参加者数と発表件数は過去最多となった。例年、かなり売れ残る当日登録者用の講演要旨集も早々と売り切れ、9名の方には目次のコピーしかお渡しできなかった。売り切れ現象は「一家に一枚周期表」（150枚用意）でも見られた。

学術・研究交流が中心であった支部研究発表会に、化学教育・普及、産学連携等の事業も取り込んでみた結果、相乗効果が現れた。前例にとらわれない企画・運営のメリットに気づかされた会員は少なくないと確信する。緊張の夏はとうに過ぎて初雪がチラつく今も、心の中には熱さが残っている。

支部研究発表会の実行委員長として陣頭指揮にあたった板橋豊先生（北大院水教授）に深く、感謝と敬意を表する。

©2006 The Chemical Society of Japan